



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

「雨が降らないあいだに」とは言えないのか？

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 岐阜大学留学生センター 公開日: 2022-12-26 キーワード (Ja): 継続的状态, 事実報道, 意志・無意志, 線的な動詞・点的な動詞, ニュアンス キーワード (En): 作成者: 加藤, 由紀子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/22221

「雨が降らないあいだに」とは言えないのか？

Can't We Use the Phrase "Ame ga furanai aidani ~" ?

加藤由紀子

要旨

本稿は、従来の日本語文法では扱われなかった、あるいはその使用は適切ではないとされてきた文型、「～ないあいだに」を前件に持つ複文について考察したものである。

現代語を調べてみると、この文型が予想以上に頻繁に使われていることが分かった。また、これらの文を観察してみると、正用文（文法的に適切である文）であると判断できるものも多く見られた。本稿では、実際に使われた文を取り上げ、どのような文が正用文になるのか、またそれらの文に共通する要素は何かについて検討した。

キーワード：継続的状态、事実報道、意志・無意志、線的な動詞・点的な動詞、ニュアンス

1. はじめに

本稿は、時の設定にかかわる「～あいだに」を前件を持つ複文のうち、否定形が前接する「～ないあいだに」という文型の使用が可能かどうかについて考察したものである。日本語文法の辞書類には、「～ないあいだに」に関する説明がないか、そのような使用は日本語として適当ではないという記述があるだけで、「～ないあいだに」の使用を認めるとする記述は見当たらない。しかし、日常生活の中では、かなり頻繁に使用されているものと思われる。

本稿では、インターネットの検索エンジンを使用して、実際の使用例（本稿の例文で出典を示さないものは作例である）を集め、その使われ方を分析することにより、「～ないあいだに」という表現が文法的に誤りか否か、また、どのような場合にその使用が可能になるかについて検討する。

2. 先行研究

まず、日本語文法の辞書の「あいだに」に関する主な記述を以下に挙げる。

(1) 『日本語文型辞典』(1999:2-3)

「～ないうちに」の記述はあるが、「～ないあいだに」についてのものはない。

(2) "A Dictionary of Basic Japanese Grammar" (1986:67-71)

「～あいだに」の項目に「～ないあいだに」の記述はないが、「うちに」の関連説明(1986:515)の中には記述がある。そこには、「うちに」「あいだに」の両方が使える場合もあるが、置き換えができないものがあるとして以下の例を挙げている。（*は非文／誤用文の印である）

雨が降らないうちに／*間にテニスをします。

その理由として、以下のように述べている

「うちに」を「あいだに」に置き換えられない理由は、時間の境界線が明確にできないからである。（筆者訳）

しかし、ここで「時間の境界線が明確ではない」としている部分は、前件の内容のことである

うか。また、そうであるとしたら、これがこの例文を非文にする理由なのであろうか。

(3) 『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』(2000:205-206)

「～ないあいだに」という表現を否定する説明がある。内容は以下の通りである。

「うちに」は「あいだに」「まえに」との使い分けが問題です。

- (6) a. 子どもが寝ているうちに洗濯した。
b. 子どもが寝ているあいだに洗濯した。
c. 子どもが目覚ますまえに洗濯した。

まず、「P うちに Q」と「P あいだに Q」との違いは、「うちに」には「P できないと Q ができない (だから、P のあいだに Q をする)」というニュアンスが強いのに対し、「あいだに」にはそういうニュアンスがあまりないということです。なお「うちに」の場合は「P でないと」の部分に否定が含まれていることから、(7) a のように普通形の否定形が後接できますが、「あいだ」は否定形には後接しません。

- (7) a. ○ 子どもが目覚まさないうちに洗濯した。
b. × 子どもが目覚まさない間に洗濯した。

しかし、以上の記述内容には疑問がある。(7) b のような例文は、本当に存在しないのであろうか。2006年9月23日に検索エンジン google で「ない間に」を検索したところ、1,590,000件の使用例(これには「～ないまえに」も含まれている)が見られ、一般的に使用されていることがうかがえる。

なお、「目を覚まさない間に」で検索した場合にも、以下の2件があった。

- 1) フュリーが目を覚まさない間に、次々と事件は起こり状況は酷く変わってしまっていた。¹⁾
(tokyo.cool.ne.jp/mikayu77/.../novels/short-story/a-survivor-is-.htm)
2) 真ん中のダルマ(?)が目を覚まさない間に、動いてください。目が開いているときに動いていると、ペンギンが爆発しちゃいます。
(1yuukan.blog28.fc2.com/blog-entry-376.html)

3. 分析

ここでは、実際に「～ないあいだに」という表現を持つ複文の使用例を取り上げ、現代文における用法を考えていきたい。また、分析に入る前に、google 検索の最初の 500 例に(文法的に崩れている文を除いたもの)に共通点があったことを明らかにしておく。それは、ほとんどの文において、前件の主語と後件の主語が異なっていたということである。しかし、500 例の中の数例には、前件と後件の主語が同様であるものがあった。その場合は、少なくとも前件か後件のどちらかの述語(検討した例文については動詞であった)は、主語の意志でコントロールできないものであった。それは次のようなものである。

- 3) 多くの人知らない間にお金をドブに捨てている。
(pcweb03.livedoor.biz/archives/50367390.html)

この例文については、3. 3 で詳しく述べることにする。

3. 1 「A-ない間に」

はじめに、形容詞について考える。文法書には、形容詞に「ないうちに」は後接できるが、「ない

あいだ」は後接できないと記述されている。しかし、用例は少ないものの、それらの文型が存在することが分かった。以下に示すものがその例である。

- 4) 長い痛みに耐えて、ほんの少しの痛くない間に車まで歩く。

(www.k5.dion.ne.jp/~akachan/shussan1.html)

- 5) 作業は明るくて寒くない間に終わらせる。

(mits10.ori.u-tokyo.ac.jp/hattori/mirai_tumikomi.html)

- 6) 梅雨が明ける前のまだそんなに暑くない間に、夏本番になる前に掃除を済ませておかないと・・・ということになるのです。

(www.chugoku-np.co.jp/okonomi/communication/O304062302.html)

以上の3つの例文は、意味的には多少の違いが出てくるものの、どれも「うちに」に置き換えが可能である。では、置き換えた場合には、どのような違いが生じるのであろうか。

寺村秀夫(1999:145)は、「うちに」と「あいだに」の違いについて、以下のように述べている。

PウチニQが、PアイダニQと異なるのは、・・・(中略)・・・Pウチニによって限定されたQにこめられた意味の違いでもある。どこが違うかといえば、PアイダニQは、単にPという時間の幅のどこかでQという事態が生起する、というだけであるが、PウチニQは、Pが、それに対立するP'という時に移行したとき、実現不可能か、困難になるような事態であるか、または、そのような事態が起こるのが普通でないような事態であるという含みがある。

この記述から、「あいだに」は単なる時間の幅と考えてもよいのに対して、「うちに」には、いつか今の状態が変化する、そして、状態が変化した後には後件で示したことができなくなるという切迫した緊張感があるというのである。

確かに上の例文4、5、6を「うちに」に置き換えるとニュアンスが変化して、時間的に切迫した緊張感がある内容になる。しかし、置き換えずに「あいだに」のままであっても、文法的に問題はなく、「痛くない」「寒くない」「暑くない」という状態の「間に」後件をするという意味になるだけである。

3. 2「V-ていないあいだに」

google 検索エンジンを使って、「～ない間に」を検索すると、出て来る例文は個人の日々の出来事や自分の意見を書き込むブログからのものが多いためか、「～ていないあいだに」という形で出て来るものは少なく、ほとんどが「～てないあいだに」という文型になっていた。ある意味で、これも現代的な使用の特徴であると言えるであろう。また、このことは、「～ないあいだに」の使用が、口語的表現に多いことをも示している。

さて、例文を検討していく際には、「V-て(い)ないあいだに」の複文の前件に点的な動詞²⁾が来る場合と、線の動詞²⁾が来る場合に分けて考えていく。

まず、点的な動詞が来る場合を考える。

- 7) 更新してない間にまた沢山のアイテムが入荷してきました。

(tokishirazu.jugem.jp/?month=200605)

- 8) ちょっとネットに繋いでない間にそこかしこからリンクを貼られてた。

(buraineko.blog19.fc2.com/blog-category-2.html)

9) 日本の国会議員やメディアが全く気がついて**ない間に**、実は北朝鮮の核をめぐって、日本の政治体制を根底から揺るがしかねない事態が生じているのです。

(www.mission21.gr.jp/archives/2005_03.html)

点的な動詞は「～ている」の形を取ることによって、その動詞の結果継続の状態を表す。一方、これらの動詞の「～ている」の否定形「～て(い)ない」は、そうっていない／そうしていないという継続の状態を表すことになる。そのため「Vて(い)ないあいだに」という文型で、そのような状態になる前の状態が続いている期間を限定することができる。つまり、上の例文は、前件で限定された期間内に後件が起こるという意味になり、正用文であると考えられる。

次に、線的な動詞が来る場合を考える。

10) (ブログを)しばらく書いて**ない間に**、色んなことがありました。

(workwork.blog48.fc2.com/blog-entry-29.html)

11) 友人はしばらく会って**いない間に**、ずいぶんやせていた。

(www.shoten.co.jp/nisho/bookstore/shinbun/view.asp?PageViewNo=1124-23k)

まずここでは、線的な動詞「V-ている」と「V-ていない」について考えてみる。時を規定する前件を持つ複文において、前件に来る「V-ている」の形が意味するものには、現在の動作の継続を表す場合と、習慣的動作の継続を表す場合がある。しかし、否定形の場合は、例文 10 と 11 から分かるように、動作の否定的継続という場合だけでなく、否定的習慣の継続という要素も合わせ持つ場合があると考えられる。つまり、「書いていない」「会っていない」という状況が継続していることを表しているというだけでなく、その継続時間が長い場合にはその状態が習慣的なものとなっている場合もあるということである。そのため、「あいだに」に前接する内容は、状態・動作が続いている期間を表すものでなければならないという条件を満たすことになるので、「～て(い)ないあいだに」という用法に違和感がないのではないかと考える。

ここで、先行研究で疑問を持った文「雨が降っていない間に、テニスをします」に近い例文 12 を考えてみる。

12) 雨が降って**ない間に**、外に出た。

(www.kansaikajoken.com/papy%20walker/papy%20diary%200209.html)

例文 12 を、例文 10、11 で検討した前件は継続的状态でなければならないという視点から考えると、問題があるとは考えにくい。“A Dictionary of Basic Japanese Grammar”で「時間の境界線が明確ではない」としていることが、前件のことであるとすれば、それはこの例文を誤用文とする理由にならない。この例文で問題とすべきは、後件なのではないだろうか。

問題とした例文「雨が降っていない間に、テニスをします。」の後件は、「テニスをする」という時間的に線的な動詞である。一方、「外に出る」は点的な動詞である。「あいだに」の後件は、点的な動詞であっても線的な動詞であっても、前件の状態である「あいだに」後件が起こる状況であれば問題ない。しかし、その状況が十分説明されていない文では、点的な動詞を使用した方が聞き手に誤解を与えにくいので、「テニスをする」には違和感があり、「外に出る」には違和感がないように感じられるという可能性が考えられる。だが、それ以上に大きな原因は、「テニスをします」は話者の意志表明の文である可能性がまず考えられるのに対して、「外に出た」は事実報道の文である点である。意志の表明では、「雨が降っていない間に」テニスができるかどうか分からないと考えることもできる。一方、「外に出た」というように過去形にすることで事実報道の文にすれば、「前件で

限定された期間内に後件が起こった／をした」ということが明らかになり、文法的に問題がなくなる。つまり、「テニスをする」という動詞も、例文 12 のように過去形にして事実報道の形にすれば問題はなくなる。

13) 雨が降っていない間に、テニスをした。

同様に、例文 7～12 を見ると、これらすべての文の後件が事実報道の文になっていることがわかる。また、検索した文に当たってみると、正用文である場合は、過去のことや過去の習慣あるいは現在の状況を表す事実報道の文になっていることが分かった。これは前述した寺村の「P アイダニ Q は、単に P という時間の幅のどこかで Q という事態が生起する、というだけである」という記述にも一致するものである。

3. 3 「V-ないあいだに」

はじめに、存在の動詞について見ていく。まず、動詞「ある」の否定形「ない」について考えてみよう。

14) 生活習慣病を自覚症状のない間に発見し早期治療を行う。

(ja.wikipedia.org/wiki)

15) 記憶のない間に自分が何をしていたのか分からないため、不安になります。

(homepage1.nifty.com/eggs/syuhon/kairi.html)

16) 動物は訴える言葉を持ちませんから、嫌な事をされているという認識のない間に、苦痛や不安感を取り去って各種の検査をして診断を確定しなければなりません。

(fms.fujifilm.co.jp/fms/animal/picov/jirei01.html)

以上の3つの例文にあるように、「ない」の主語には認識に関するものが多く見られた。その他の主語は多様で、項目別に分類できないので、以下にその一部を示す。

17) 彼女は俺と逢う機会のない間に、本気で惚れた男が出来て、その直後に実は結婚していたと言う。

(www.kyabadoku.com/renai2/love2-05.htm)

18) なんの連絡もない間に勝手にゲストになってるの？

(www.ltokyo.com/yanasita/diary/98061.html)

19) イースターで人通りのない間にお花の植え替えをしており、残念ながらお庭はほとんど緑一色でした。

(www5d.biglobe.ne.jp/~miminana/special/special.html)

20) 授業のない間に、本業を少しでもこなしておかなければ・・・。

(www.slis.keio.ac.jp/~baku/bkpkbk16.htm)

次に、存在動詞「いる」の否定形について考える。「鬼のいぬ間に洗濯」という表現があるが、この場合は「いぬまに」であって「いないあいだに」ではない。しかし、意味的には、以下の文と同様の用法であると考えてよいであろう。

21) ぼくのいない間に変わったことはなかったかな？

(chikami-mario.cocolog-nifty.com/mario/2006/10/post_c5ff.html)

「いる」に関しては、「ある」の主語ほど多様な内容はなく、人あるいは動物しか主語に表れないので、例文はこのひとつにとどめる。

さて、「ある」「いる」という動詞は状態動詞である。だとすれば、肯定形の状態の反対の状態が

否定形で表せることになる。つまり、その否定的な継続状態の中で、後件が起こるということであるから、文法的に問題がない。

確かに、例文 16 と 20 は「ないうちに」に置き換えが可能である。それは、この二つの例文の内容に、3.1 で寺村の説を引いたように、時間的緊張感があるからである。しかし、その他の例文は、前件が状態の時間的な幅しか表していないので、「ないうちに」には置き換えられない。

次に、「(V 可能形) - ないあいだに」と「(可能の意味を持つ) V - ないあいだに」について考察する。まず、「(V 可能形) - ないあいだに」の例文を見てみよう。

22) 会えない間に、私の誕生日が終わってしまったんです。

(ruribitakii.fc2web.com/rurinikki2004/0407.html)

23) 仕事の都合で稽古に顔を出せない間に、脚本も決まり読み合わせが始まった。

(www.gem.hi-ho.ne.jp/kaniza/diary/d2000_08.htm - 8k)

例文 22、23 を見て分かるように、意志動詞を可能形にすると状態を表す動詞になる。また、その否定形も状態を表す。つまり前件が継続の状態を表わすことになるため、「あいだに」が後接しても違和感がないのである。

24) エンジニアは法律のことに鈍いので、分からない間に違反していることもあるかもしれません。

(www.ertl.jp/SWEST/SWEST5/report/F3-2.txt)

例文 24 の「分かる」は可能の意味を持つ動詞であるので、例文 22、23 の動詞の可能形の場合と同様に、「分かる」の否定形「分からない」で継続の状態を表すことになるため、文に違和感がない。これらの例から、前件が状態を表し、その時間の幅の中で後件が起こるような文は、正用文であると考えられる。

また、これらの文の後件も、3.1 の「形容詞 + ないあいだに」の例文と同様に、点的な動詞が用いられた事実報道の文になっていることが分かった。

最後に、可能形ではない動詞と可能の意味を持たない動詞が前件に来る「V - ないあいだに」の例文を見ることにする。

25) 立つた處で、) 一分も経たない間に、その脚は、封臘の棒のやうに、中途からぼき (・・・) と折れてしまふ

(www.lang.nagoya-u.ac.jp/~matsuoka/dickens/carol/carol-morita-5.html)

26) この半世紀にもみたくない間に、日本の自然はさまざまな開発の名のもとに破壊されつづけてきた。

(www.nichibenren.or.jp/ja/opinion/hr_res/1991_2.html)

例文 25、26 のように、時を表す言葉の後に「に (も) 満たない」「も経たない」が来る表現はかなり見られた。その他の動詞は様々であるが、すべてに共通していることは、どれも点的な動詞であるということである。

27) 8 年来ない間に米国は、「ようこそ」という言葉が皮肉になる国になってしまった。

(masano-atsuko.at.webry.info/200501/article_1.html)

28) 軟骨が堅くならない間に変形した所に矯正用器具を使うと良い格好になる。

(homepage1.nifty.com/jibiaka50/jikaihenkeisenten.htm)

29) 最近のウィルスは本人がまったく気がつかない間に大量のメールをブラウザキャッシュな

どのメールアドレスに片っ端から送信しまくっている。

(homepage2.nifty.com/sak/w_sak3/doc/syspc/pc_w04.htm)

例文 27 の「来る」は一見線動的な動詞に見えるが、実は到着時点に視点がある点的な動詞である。その意味では、例文 28 の「堅くなる」と同様である。このような点的な動詞を否定形にすることは、その点以外の線の部分、つまり継続的状态を表すことになる。そのため、点的な動詞の否定形が「あいだに」と結びついても違和感がないようになるのである。この場合の「～ないあいだに」は「～る前に」という意味になる。これは、分析の初めのところで提出した例文 3 にも共通することである。

3) 多くの人が知らない間にお金をドブに捨てている。

「知る」は点的な動詞であるが、その動詞を否定形にすることで継続的状态を表しているのである。

これらの文の後件は、例文 25 のように、点的な動詞になる場合が多いが、例文 26 や 29 のように、「～つづけてきた」「～まくる」「～ている」を付けて線動的なものにしたりすることもある。しかし、線動的な意味を持ったとしても、前件の時間の間に後件の事柄が時間的におさまれば問題はない。また、ここでも、3.2 と同様に、後件が事実報道の文になっていることが分かる。

ここで、例文 3 についてさらに分析を加える。この文は、前件と後件の主語が同じであるという特殊な文のうちのひとつである。このような文では、前述したように、前件か後件のどちらかが主語にはコントロールできない事柄になっている。この例文の場合は、前件「知らない」は自分の意志でコントロールできない状態である。また、後件の「ドブに捨てる」は意志動詞であるが、「～ている」を後接することで状態を表す文にしている。つまり事実報道の文になっているのである。さらに、当然の予測（加藤 2000）として、「お金をわざとドブに捨てる」人はいないから、「意図せずして捨てている」のであろうと読者が考えてしまった場合には、前件・後件ともに意志的ではないことになる。

3.4 「V-ていないあいだに」と「V-ないあいだに」

3.3 では、前件が線動的な動詞をとる場合、「～ていないあいだに」という形になる文にだけ触れた。しかし、線動的な動詞は「～ていないあいだに」という形だけでなく、「～ないあいだに」という形になることも可能である。では、それはどのような場合であるか考えてみよう。

まず、「雨が降る」という無意志動詞で考えることにする。

30) 雨が**降っていない間に**、村人は様々な仕事をする。

31) 雨が**降らない間に**、村人は様々な仕事をする。

上の二つの文を比べると、「降っていない」の方が時間的に短いと感じ、反対に「降らない」は長くぶん長いと感じる、あるいは少なくとも「降らない間に」の場合は、「時間的に短い」とは感じられない。もしこれらの文の前に「乾季で」という原因を付け加えたとしたら、例文 30 より例文 31 の「雨が降らないあいだに」のほうが、なじむであろう。

では、意志動詞の場合はどうであろうか。ここでは、3.3 で出て来た例文で考えることにする。

10) (ブログを) しばらく書いて**ない間に**、色んなことができました。

11) 友人はしばらく**会っていない間に**、ずいぶんやせていた。

以上の2つの例文の動詞を「書かない」「会わない」に変えてみよう。

10') (ブログを) しばらく**書かない間に**、色んなことができました。

11') 友人はしばらく会わない間に、ずいぶんやせていた。

例文 10、11 が話者の意志を含まない状態だけを表しているのに対して、例文 10'、11' では、話者が意志的に「書かない」「会わない」という状況を選択したという意味合いが加わる。しかし、例文の 10' と 11' で、その意味合いが全く同じであるかという点、そうではない。「会う」のように相手があって成立する動詞の場合は、「会わない」は話者の意志で会わないことを選択したという意味だけではなく、「会っていない」という状態に近い意味もあることが分かる。「会う」と同様の動きをするものに、「話す」「相談する」などがある。

次に、意志動詞で「～ている」と「～る」の文を比較して、時間の長さの感覚について検討してみる。例文 32 と 33 はデパートで子どもを見失ってしまったという状況を想定した文である。

32) ちょっと見ていない間に、子どもがいなくなりました。

* 33) ちょっと見ない間に、子どもがいなくなりました。

34) ちょっと見ていない間に、友達の子どもは大きくなっていった。

35) ちょっと見ない間に、友達の子どもは大きくなっていった。

例文 32 と 33 を比べると分かるように、「見ていない／見ない」という状態が、数分というような短い場合には、「見ていない」であれば正用文になるが、「見ない」では誤用文となってしまう。しかし、例文 34、35 のように、「見ていない／見ない」という状態が数日、数カ月、あるいは数年に及ぶような場合には、「見ていない」も「見ない」も使用可能であることが分かる。これは、無意識動詞「降る」の例文 30 と 31 で、時間的に長さの違いを感じたのと同様の理由によるものであると考えるのもよいのではないだろうか。

4. 「あいだ」と「うち」の意味的ニュアンスの違い

検索エンジンで検索した件数からすると、「～ないうちに」に比べ、「～ないあいだに」という例は確かに少ない。しかし、古語的用法として使われている「～ぬまに」より、現代における使用は頻繁であることが分かる。

「～ぬまに」（例文では「～ぬ間に」と表記されているが、ここでは「～ぬあいだに」とは読まないと考えられる。そのような混同を避けるために、ここではひらがな表記にする。）の例としては、3.3 の存在動詞「いる」の否定のところで挙げた常套句「鬼のいぬ間に洗濯」以外に、よく聞くものとして以下のものがある。

36) 命短し、恋せよ乙女、赤き唇、褪せぬ間に。

この「～ぬまに」は、『日本語文型辞典』（1999:49）の「ないうちに」の説明に、「その状態がいずれ変化することがわかっている場合は、『V-る前に』と言いかえられる。」とあるように、この歌の一節は「今は『赤き唇』も、時の流れでいつか褪せてしまう。そうなる前に恋をせよ。」という意味である。このことから分かるように、「～ないうちに」に置き換えが可能な「～ぬまに」の文が存在する。

では、古語的使用の「～ぬまに」が「～ないうちに」と置き換えが可能であるのに対して、「～ぬまに」とほぼ同様の形態と意味を持つ「～ないあいだに」との置き換えにはなぜ疑問が出て来るのであろうか。

まず、「あいだ」と「ま」という言葉の意味の違いについて考えてみよう。

『類語大辞典』（2002:1206）には、以下の記述がある。

〔あいだ〕 ある時点と、別の離れた時点とはさまれた、ひと続きの時間の部分。

〔ま〕 何かと何かのあいだに感じられる、空白の時間。

以上の二つの言葉で時間の長さを比べると、「あいだ」は時間の幅において規制が緩やかであるのに対して、「ま」の方は、あることが起こってから次に何か起こるまでの間の短い時間という意味があるようである。このような説明は、『広辞苑』『新解明国語辞典』等を見ても、ほぼ同様である。また、現代語の使用でも、「長い間（あいだ）」と言うことはできるが、「長い間（ま）」とは言えず、反対に「あつという間（ま）」「つかの間（ま）」のような表現があることが分かる。これらのことから、「ま」という語には「あいだ」より時間的な緊張感があることが分かる。

次に、「あいだに」と「うちに」について考えてみたい。寺村秀夫（1999:144）は以下のように述べている。

P ウチニが P アイダニと異なる点は、形容詞その他で表されている P が「外」に対する「内」という見方で把握された時の幅だという点である。P はただ時の幅ではなく、いずれその時期が終わって、次の対立する時期に移行する、そういう未来のある時期と対立するものとして把握された時の幅である。「若いウチニ」というのは、若い時期がやがて終わり、老年という時期がやってくる、そういう時の経過による変化を、対立するものとして捉える言い方である。……（中略）……P アイダ（ニ）の P もほぼ同様だが、P ウチニの P より制約がゆるいようである。

この記述から、「あいだに」は単なる時間の幅と考えてもよいのに対して、「うちに」は、いつか今の状態が変化するという緊張感を持った時間であることが分かる。

以上のことから、「あいだ」は時間的緊張感がないのに対して、「ま」と「うち」という言葉には、「あまり時間がない」というニュアンスを持った緊張感があると言えよう。この違いがあるため、古語の「ま」という語の使用のうち、現代語では時間的緊張感のないものを「あいだ」で表し、時間的緊張感のあるものを「うち」で表すというように、分けて使っているのではないかと予測する。

5. まとめ

実例を挙げて見てきたように、「～ないあいだに」という文型は、広く使用されており、しかもそれらの多くは正用文であると判断できる。しかし、その使用には以下のような限定があることが認められた。

- ① すべての例文に共通して言えることは次の点である。それは、ほとんどの文において、前件の主語と後件の主語が異なるものであったということである。しかし、いくつかの文においては、前件と後件の主語が同様であった。その場合は、少なくとも前件か後件のどちらかの述語は、主語の意志でコントロールできないものであった。さらに、ほとんどの場合、後件は事実報道の文になっていた。
- ② 「A- ないあいだに」という文のうち、正用文として認められるものは少ないが、正用文もいくつかあった。それらは「～ないうちに」に置き換え可能であるが、「～ないあいだに」の文には、「～ないうちに」の文にあるような、「前件の状態が続くうちに後件をしないと、後ではできなくなる」というニュアンスはなく、「前件の状態が続いているあいだ／時に、後件をする」という意味しかない。
- ③ 「～ないあいだに」が後接できる動詞および動詞の形は、「V- ている」「ある／いる」「V 可能形」「可能の意味を持つ V」で、すべて状態を表すものである。これらが正用文になるの

は、それらの否定の形で継続的状态を表すからである。

- ④ ③で扱った動詞以外の動詞で「V + ないあいだに」が正用文になるものは点的な動詞である。それは、点の否定が線を表すこと、つまり状態を表すことになるからである。
- ⑤ 線的な動詞には、「～ていないあいだに」と「～ないあいだに」の両方が正用文として成立するものがある。この場合、前件で表される内容は、「～ていないあいだに」の方が「～ないあいだに」より時間的に短い。また、それらの違いは、無意志動詞では、時間の長さの違いを感じるだけであるが、意志動詞では、前件の内容が時間的に短い場合は「～ていないあいだに」が後接し、長い場合は「～ないあいだに」が後接するという使い分けをしなければならない場合がある。
- ⑥ 現代的用法では、古語の「～ぬまに」を、時間に限りがあるという緊張感を持ったものは「～ないうちに」で表現し、そのような緊張感のないものは「～ないあいだに」で表現するというように使い分けしているのではないかと予測する。

本稿では、前件の内容だけに注目し、後件に関しては事実報道の文であるか否かだけしか考えなかった。今後の課題は、アスペクトとテンスまでを含んで後件を分析し、それらと前件の関わりを検討することである。また、まとめの⑥で述べた内容は、言葉の意味から考えた予想でしかない。今後、「あいだ」「うち」「ま」の使用例と歴史的使用の変遷を考察したいと考えている。

参考文献

- 加藤由紀子 (2000) 「<せっかく～のに>文の誤用とその背景」
『岐阜大学留学生センター紀要』岐阜大学留学生センター
- 加藤由紀子 (2003) 「従属節としてのトキ ―初級におけるトキ節をめぐって」
『岐阜大学留学生センター紀要』岐阜大学留学生センター
- 加藤由紀子 (2004) 「トキ節の時間的な特徴についての考察」
『岐阜大学留学生センター紀要』岐阜大学留学生センター
- 工藤真由美 (2002) 『アスペクトとテンス体系とテキスト―現代日本語の時間と表現―』
ひつじ書房
- 寺村秀夫 (1999) 『寺村秀夫論文集 I ―日本語文法編―』くろしお出版
- 益岡隆志 (1997) 『新日本語文法選書 2 複文』くろしお出版
- 宮島達夫、仁田義雄編『日本語類儀表現の文法 (下) 複文・連文編』くろしお出版

辞書類

- 庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘 (2000)
『初級の教える人のための日本語初級ハンドブック』(スリーエーネットワーク)
- 金田一京助、山田忠雄、柴田武、西井憲二、倉持保男、山田明雄 (2002)
『新明解国語辞典第五版』(三省堂)
- グループ・ジャマシー編著 (1999) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 柴田武、山田進編 (2002) 『類義語大辞典』講談社

新村出編（1998）『広辞苑第四版』 岩波出版

Seiichi Makino and Michio Tsutsui（1986）“A Dictionary of Basic Japanese Grammar”

The Japan Times

注

- 1) 本稿に提出した例文を正用文であるか誤用文であるか判断するにあたっては、母語話者 24 人（うち日本語教師 8 人）に確認した。
- 2) 点的な動詞と線的な動詞については、岐阜大学留学生センター紀要「従属節としてのトキ ― 初級におけるトキ節をめぐって―」（2003）と「トキ節の時間的な特徴についての一考察」（2004）の中で筆者が使用した表現である。瞬間動詞／結果継続動詞として分類されているものは点的な動詞であり、継続動詞として分類されているものは線的な動詞であるということは従来と同様である。それに加えて、帰着点に至るまでの行動を視野に入れながらも、帰着点に視点がある「行く」「来る」などを点的な動詞、また「集まる」のように一人一人の行動としては点的なものであるが、それが複数になれば、いくつかの点の集まりが線になることから線的な動詞、という概念で動詞を分類した。